

不安定だった家族関係が、安定した症例

医療法人社団 KNI 北原リハビリテーション病院
作業療法士 藤生知美

【はじめに】

片方の病気による夫婦関係の変化に直面し、葛藤を抱えるということは稀ではないと、述べられている。(浅海ら, 2010). 作業療法では、クライアントの作業を可能にすることが重要である。クライアントが作業に従事するためには、家族や社会など環境からの支援が必要になることが少なくない。多くの理論の中で、人は環境からの影響を強く受けるとされている。

今回、家族の支援が必要な症例を担当し、夫婦関係が破綻しそうな状況に対して、症例と環境(家族)に介入をしたことで、夫婦の新たな関係と生活を構築できたため、以下に報告する。

【作業療法評価】

社会的背景:

A 氏, 80 代男性. 妻, 息子と 3 人暮らし. 長女は近隣に在住. 70 歳以降から体調不良を訴え活動量が低下. 80 歳で熱中症を患ったことを機に、怠惰な生活を送るようになった. 妻は家事の全てに加え, A 氏を介護していた. 妻はその状況に不満を感じていたが, A 氏は気にする様子がなかった.

入院中の様子:

既往の関節リウマチに加え, 今回, 軽度の右片麻痺を呈したが, 屋内歩行・身辺処理は自立可能なレベルであった. しかし病前からの依存的な様子は変わらず, 身辺処理に介助を要していた.

【経過】

妻を助ける意欲を向上させた時期:(症例への介入)

妻は, A 氏の退院を考えると不安となり, 体調不良を繰り返し, 今までの不満を多く漏らしていた. A 氏という人柄を受け入れ難くなっているように感じられた.

妻の体調不良・心情を A 氏と共有した. A 氏は落ち込む様子を見せたが, 次第に妻を思いやる発言が聞かれるようになってきた. そのため, 「できることは自分で行い, 家族の負担を減らす」という目標を共有し, リハビリテーションに取り組んだ. 結果身辺処理は概ね自立し, 見違えるように家事への訓練にも取り組んでいった.

妻の思いを傾聴しつつ, A 氏の意欲を伝えた時期:(環境への介入)

妻は, A 氏に対して否定的な発言が続いていた. そのため, 妻への介入として, 電話にて, 何度か妻の不満を傾聴し, 共感する姿勢を示した. 妻の気持ちに配慮しつつ, A 氏に妻を支援したいという心情の変化がみられていることや, そのための具体的な目標に向かって取り組んでいることを伝えた. また, A 氏が一生懸命取り組んでいることを, 妻に正確に伝えたいため, 長女・長男に実際に A 氏の現状を見てもらい, 妻が信頼できる長女・長男から妻に話をしてもらった.

妻が A 氏を受け入れた時期:(結果)

妻は, ケアマネジャーを含めたカンファレンスに参加して, 退院後の生活が具体的にイメージできたことで, 安心して A 氏の自宅退院を受け入れることができた.

【考察】

高齢者は加齢に伴った身体健康の喪失・生きる目的の喪失を体験し, 適応ができず依存傾向になると述べられている(浅海ら, 2010). 些細な体調不良により A 氏が怠惰な生活となってから, 妻一人が葛藤を抱え, 不満を持ちながら生活していた. しかし, 作業を可能にしていくためには, 個人と環境のどちらかに負担が偏ることなく, 程よいバランスが重要になると考える. 今回, A 氏に妻の心情を伝えたことで, 自分でできること(身辺処理・家事)はしたいと心情が変化し, 新たな役割を構築した. また, 妻の思いを傾聴したことで, 妻は周囲に今までの負担を認めてもらえ, 安心できたのではないかと考える. それにより, 今までのような表面的に安定した夫婦関係ではなく, 個人と環境が支え合う, 調和した状態となることで, 真の安定した生活を送ることができたと考える. 今後, 対象者のみならずそれを取り巻く環境, 環境との相互関係や安定性を把握し, アプローチをしていきたい.